

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成24年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム

「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」

研究開発プロジェクト

「広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成」

研究代表者 佐藤 滋
(早稲田大学 教授)

1. 研究開発プロジェクト名

広域避難者による多居住・分散型ネットワーク・コミュニティの形成

2. 研究開発実施の要約

①研究開発目標

福島第1原子力発電所事故により広域に分散して避難することを強いられている福島県浪江町の、長期にわたる復興を支えるコミュニティの在り方を「ネットワーク・コミュニティ」とし、関係者によるワークショップなどにより協働でデザインする。同時に、分散したネットワーク・コミュニティを支えるための、円滑な移動手段、情報交流等のための仕組みを開発し、実装実験に取り組む。上記のネットワーク・コミュニティに関する科学的な評価尺度を、継続的なインタビュー調査等を進めつつ開発し、応用する。

②実施項目・内容

- ・ 過去に実施したワークショップやヒアリング調査を基に、町外・町内コミュニティの検討とデザインを住民主体で進め、散在する町外・町内コミュニティ、公共施設等を連携するネットワーク・コミュニティのプログラムについて、事例による勉強会や意見交換を実施した。
- ・ 包括的生活サポートシステム開発の準備として、地域日常生活の課題認知システム・生活・福祉・介護システムの基本となる、避難先の移動交通の現状と避難住民の生活行動調査を行った。
- ・ 総合的評価システム開発グループでは、社会心理学的評価手法の理論化および評価の実践と、コミュニティの質に関する評価研究に関するプレ調査を実施した。

③主な結果

浪江町の町内外を含めた長期にわたる地域社会の像としての「ネットワーク・コミュニティ」に関して、初動期にどのような具体的な取り組みを進めるのかを検討するのが、平成24年度半年間の活動目標であった。Ristex研究チームと地元の協力者、活動の中心になるメンバーとの協議や、民間での復興計画作成と実行の中核となる「なみえ復興塾」幹事会、全体ワークショップなどを通してこの目標は、概ね達成されている。特に、1) 4つの始動プロジェクトのイメージが共有されたこと、2) 包括的移動サポートシステムとして、「新ぐるりんこ」の全体像が確認され運営主体に関しても方向付けがされたなど、成果を上げることができた。このような事をふまえて、本年度の目標であった、研究の基本的な条件の整備がほぼできたと考える。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

福島第一原発事故の被災自治体である浪江町の町民の多くは、仮設住宅などで分散居住を余儀なくされている。仮設住宅団地などを核にした分散する居住拠点を「町外コミュニティ」と呼び、さらに点在する公共施設との有機的な連携によって成り立つ状況を「ネットワーク・コミュニティ」として位置付け、高齢者の長期にわたる避難生活を、安定し充実した活力ある地域社会とするため、以下に示す4つの目標を達成する。

これにより、災害の影響による多居住・分散型コミュニティを具体的に検討し、それが高齢者のウェルビーイングにどのような影響をもたらすのかを解明する。

1 ネットワーク・コミュニティを構成する「町外コミュニティ」の空間像、生活像を、ワークショップなどにより協働でデザインし、象徴的なプロジェクトに着手できるようにする。

後述の「包括的生活サポートシステム」、避難者の心理的状況の把握・総合評価の成果を取り入れ、1) ネットワーク・コミュニティを前提とした多様な居住様式に対応する住まいと生活像の在り方、2) 町外コミュニティを段階的に充実させるための、循環的な居住環境の改善プログラム、3) 町外コミュニティの周辺地域との連携のための空間デザイン、4) 帰還のために元の浪江町内に必要となる「町内コミュニティ」のための前線基地となる場のデザイン、に具体的に取り組む。

2 ネットワーク・コミュニティを支えるための、円滑な移動手段、介護・福祉・教育支援、分散居住する高齢者の情報交流等、のための「包括的生活サポートシステム」を開発し、実装実験に取り組む。

1) このシステムにおける情報の収集、配信のための「地域包括情報システム」の開発、2) 各種の主体によるさまざまな移動・物流サービスを統合する統合的移動システムの開発、3) 分散居住する避難者に対する介護・福祉・教育支援のために高齢者がアクセスしやすい仕組みの確立、に取り組む。

1) 地域包括情報システムでは、基本的にコミュニティのリーダー層が周辺の高齢者の情報を収集し、情報端末等を用いて地域包括情報システムにアクセスし高齢者情報の交換の人的ハブになること、2) 統合的移動サービスシステムはICTを一部用いるものの、全てをコンピュータ化するのではなくオペレーターを介した電話での依頼や配車サービスを基本とし、実用化に向けて持続的で手軽なメンテナンスを可能とするシステムとすること、3) 仮設住宅団地に設置されている生活サポートセンターが上記の仕組みを活用して、より広い避難者に介護・福祉・教育支援のために高齢者がアクセスしやすい仕組みを確立することを具体的な達成目標とする。

3 ネットワーク・コミュニティに関する科学的な評価尺度を検討し、総合的な評価システムを、継続的なインタビュー調査等を進めつつ、開発する。

1) 初年度に実施するネットワーク・コミュニティの実態把握を基礎にして、心理的ウェルビーイングの信頼性の高い尺度を構成し、2) 被災高齢者を中心にモニタリング対象者を選定し継続的なインタビュー調査によって心的ウェルビーイングの変化を評価し、3) 最終的に、本プロジェクトが目指す「ネットワーク・コミュニティ」を総合的に評価する。

4 ネットワーク・コミュニティにおける情報の人的ハブとなるコミュニティリーダーを中心とした地域包括情報システムの社会実験

ネットワーク・コミュニティを運営するためにはその情報の人的ハブとなるリーダー層、及びその予備軍が極めて重要な役割を果たす。この研究開発においては、ICT等を駆使してネットワーク・コミュニティの運営の核となり情報のハブとなるリーダー層を育成することを主眼とし、これらが緊密に連携するための地域包括情報システムを構築する社会実験を行う。それとともに、それらのリーダー層が地域の8割程度存在する元気な高齢者に働きかけ、より多くの高齢者がネットワーク・コミュニティに参画できる仕組みを目指す。

(2) 実施方法・実施内容

1. 研究統括及びコミュニティ運営デザイン・グループ (佐藤滋)

1) 町外・町内コミュニティの検討とデザイン

二本松市内において、a)仮設住宅、生活サポートセンターなどが集積する仮設住宅団地地域（二本松市杉内仮設住宅団地を予定）、b)中心商店街地域および、浪江町内の帰還のための前線基地となる場所を候補地として、対象地区を平成24年度に選定し、研究チームと避難者、地域住民が参画する連続ワークショップにより、町外・町内コミュニティにおける多様なライフスタイルに対応する福祉的居住様式とコミュニティ空間を協働でデザインする。

このうち、H24年度においては、2タイプの町外コミュニティと町内コミュニティの短期・長期の空間イメージと実施のための社会的プログラムの検討をワークショップを通じて行った。

2) 散在する町外・町内コミュニティ、公共施設等を連携するネットワーク・コミュニティのプログラム検討

散在する仮設住宅団地、被災者がバラバラに生活している借り上げ仮設住宅、新たに建設される予定のある復興公営住宅の3つを連携させることにより、被災者の生活の安定につなげる。また、段階的な本格住宅への建替えを循環的に進めるためのプログラムを、関係者の協力によるワークショップなどをおして、関係機関が適用することができるよう複数の選択肢をデザインする。

このうち、H24年度は二本松を中心とした仮説的なプログラムを作成した。

3) ネットワーク・コミュニティの運営に関わる社会実験の統括と推進

「まちづくりNPO新町なみえ」、NPO法人JIN、避難者自治組織を中心に、ネットワーク・コミュニティをより良く実現するための社会実験を統括する。開発される包括的生活サポートシステムとコミュニティデザインの成果を総合し、多様なコミュニティを移動・循環を前提としたネットワーク・コミュニティとして、活力ある高齢社会のコミュニティの運営システムをデザインし、推進を図る。

H24年度においては、社会実験の候補地である杉内仮設住宅団地において、NPO法人JINと協力してヒヤリング調査を進め、社会実験のための基礎的条件の整備に努めた。

2. 包括的生活サポートシステム開発グループ (浅野光行)

研究代表者の率いるグループで提案するネットワーク・コミュニティのデザインと連携し、そこでの生活支援とコミュニティの充実のため、以下のようなハード・ソフト両面から技術開発を進める。次に、これらを融合した包括的なシステムのデザインを、実装的な社会実験を通して進める。技術開発にあたっての基本的な取り組みは以下のとおりである。

- ・ネットワーク・コミュニティにおける情報の人的ハブとなるコミュニティリーダーが中核となって機能するシステムとする。
- ・地域の既存コミュニティとの緊密な融和をはかる。
- ・高齢者ができるだけ外出機会を得て、多世代との交流を可能とする。
- ・外部からの支援だけでなく、自律的活動の取り組みを考慮する。
- ・技術開発は既存技術の応用との組み合わせを基本とする。

1) 地域日常生活の課題認知システムの開発

コミュニティリーダーを人的なハブとして、高齢避難者がコミュニケーションを展開できるシステムを開発する。地域SNS或いは地域掲示板を通して、日々の生活から生じる要望、意見、感想等々をこのシステムの中に集約、蓄積することによって包括的生活サポートシステムの内容が決められる。

- ・ネットワーク・コミュニティを構成する生活者の日常生活、行動、意見、要望等を蓄積し、今後のシステム開発の枠組みを作成する。
- ・そのために、人的なハブとなるコミュニティリーダーにタブレット型の情報端末(アップル社製のiPad)を貸与し、個人及び収集された日々の行動、意見等、及び公共施設などの基礎的情報をサーバー上にGIS等を活用し蓄積する。
- ・平成24年度では、来年度以降の実装実験の準備として、人的ハブとなるコミュニティリーダーに携帯端末の利用方法等講習会を実施した。

2) 生活・福祉・介護サポートシステムの開発

高齢避難者においては、地域生活の中で生じる精神的ストレスや地域の将来像に関するコミュニケーションが展開されることとなる。これらのコミュニケーションに含まれる情報は生活サポートや心のケアサービスに繋がってゆく情報でもある。高齢者・障害者が健康的に多様な活動によって生活できるコミュニティを支えるための生活・福祉・介護システムを開発する。

- ・仮設住宅団地において(杉内仮設住宅を想定している)デイサービス、生活サポートセンターを開設しているNPO法人JINの活動をとおして、福祉・介護、就業支援および移動に関わる包括的な生活サポートシステムの検討を行う。
- ・このとき、初期的な地域情報システムを立ち上げて、さらに、その活用を実験的に始めるとともに、その活用方法に関する教育・指導を生活サポートセンター、仮設住宅の集会所への出張などとおして行う。このようにして、包括的生活サポート情報の伝達・広報、収集を図る仕組みを検討する。
- ・特に、多様な福祉介護にかかわるスキームについて、その必要性と可能性、具体的な内容に関して、佐藤グループの行うワークショップ、安藤グループのヒアリング調査・面接調査の結果を活用して検討する。

3) 統合型移動システムの開発

ネットワーク・コミュニティの内外を連携する移動手段に関して、移動対象となる交通情報の分析をもとに、生活サービス、就業サービス、福祉・介護サービスにおいて人の移動を組み合わせた統合型の移動サービスシステムを開発する。

- ・生活者の日常生活を支える移動サポートについて、公共のバスサービス(一般、コミュニティ、オンデマンドなど)はもとより、医療、福祉、買い物等における様々な移動サービスの事例を収集し、ネットワーク・コミュニティへの適用性を分析する。
- ・その上で、統合型移動システムの枠組みを明らかにし、実装実験を行うアイテムを絞り込む。
- ・平成24年度では、統合型移動システムの枠組みとして、3種類の移動システムを組み合わせることを関係者間で共有し、日常生活における既存の移動サービスを補完するシステムの実験運行に向けての準備を進めた。

4) 地域包括情報システムの開発

包括的生活サポートシステムを有機的に働かせるために、移動、各種生活サービス、

福祉などが一体的に機能することを支える地域包括情報システムを開発し、実装実験を通して具体化する。

- ・既存の各種生活サポートシステムの実態およびワークショップによる多様な生活像の協働デザイン、及び町外コミュニティのモデルデザイン（研究開発結果・成果の実施項目①）の蓄積データをもとに地域包括情報システムに組み入れるコンテンツを明らかにする。
- ・地域包括情報システムにアクセスする情報端末は基本的にコミュニティリーダーが主に活用しつつ、周辺の高齢者の情報収集・伝達の人的ハブとなることを想定したシステムとする。
- ・以上を、二本松市においてNPO法人JINが生活サポートセンターを運営している仮設住宅を中心に人的ネットワークを形成する実装実験を進める。

3. 総合的評価システム開発グループ（安藤清志）

原発事故の避難者は、他の東日本大震災被災者と比べて極めて大きな心的ストレスを抱えている。行政、市民組織、各種団体のリーダー達、そして専門家を含めた支援者達は、このような避難者と日々向き合いながら前向きな努力を続けている。長期を要する復興に関わる本提案研究を遂行するためには、避難者の心理的状态を観察することに加えて、すべての関係者が希望を持って前向きに復興に取り組むことができる環境を用意することが肝要である。そして、本研究の重要な側面として、計画されているさまざまな介入との関係の中で避難者の心理面と環境面の検証を継続的に行わなければならない。本研究グループは、社会心理学の方法を中心にして、住居学、コミュニティ社会学、法律学等の観点から避難者および復興に関わる人々の心理と環境を多面的に捉え、その結果を逐次プロジェクト進行の調整のためにフィードバックするとともに、心理的問題やその他の解決すべき問題を抱える人々に対してケアや情報提供を行うことを目標とする。

1) ネットワーク・コミュニティという移動を前提とした生活スタイルを送ることになる活力ある避難住民、リーダー層にとって、このような生活がどのような意味を持つのかを定期的なモニタリング調査によって明らかにする。

ネットワーク・コミュニティの構築は、住民に対してコミュニケーションの活発化や活動の多様化をもたらし、これが心理的ウェルビーイングの向上に寄与することが予想される。したがって、本プロジェクトではこれらの心理的諸側面を捉えるための面接調査および質問紙調査を、ネットワーク・コミュニティ構築の対象となっている地域とそれ以外の地域で実施し、両者を比較することによってネットワーク・コミュニティ構築の効果を評価する。さらに、ネットワーク・コミュニティが構築された地域においても、そこで提供されるサービスを利用する人ほど、心理的ウェルビーイングが向上することが予想されるため、この点を検討することによって効果測定の副次的な指標とする。また、多くの高齢者に調査に協力していただくことを考えると、自己評定尺度による測定だけでなく、面接調査に基づく質的データによる心理的ウェルビーイングなどの心理的諸側面を明らかにすることも必要となる。そこで、現地において個別の面接調査や集団面接調査を実施し、対象者の心理状態に関する発言内容を詳細に分析する予定である。平成24年度に得られたデータを用いて変数間の関係をモデル化し、以後の介入の効果を明示できる体制を整える。

H24年度は、以上に記した作業予定のうち、約40名の避難住民に対して面接調査を実施し、その結果を「喪失」という視点から検討を加えた。具体的には、大震災と原発事故による喪失の内容および状況の特殊性を抽出し、モデル化の作業をおこなった。また、面接記録に出現する単語の頻度からクラスター分析等の量的分析を行う可能性について予備的検討を実施した。

2) ネットワーク・コミュニティの中で、法的権利・義務の実態を個別のケースの類型化から評価する。

ネットワーク・コミュニティを基盤に生活を支える原発避難住民は、浪江町民としての権利・義務と、長期にわたる避難先自治体における権利・義務という複属の住民となる。また、暫定居住という要素も加わり、基本的人権の問題など、法的に極めて複雑な課題を抱えている。これまでにない、ネットワーク・コミュニティの中で、法的権利・義務の実態を個別のケースの類型化から評価し対処する方策を逐次提言する。

表 佐藤PJ 研究活動実施状況

項目 (平成24年度 6ヶ月)	10月	11月	12月	1月	2月	3月
町外・町内コミュニティのデザイン (対象コミュニティの決定と準備ワークショップ)	●ワーク ショップ ◎移動交通・生活 行動調査	●ワーク ショップ 、展示 会 ◎移動交通・生活 行動調査	●幹事 会、勉強 会	●勉強会	●ワーク ショップ	●シンポジウム ●なみえ3.11復興のつどい 浪江町町長・二本松市市長参加 (10の提言を公開)
統合型移動サービスシステムの実装実験 (使用する情報システムの開発準備)	◎移動交通・生活 行動調査	◎移動交通・生活 行動調査	●幹事 会、勉強 会	●勉強会	●ワーク ショップ	
包括的サポートシステム (システムの全体像とモデル町外コミュニティを確定)	◎移動交通・生活 行動調査	◎移動交通・生活 行動調査	●幹事 会、勉強 会	●勉強会	●ワーク ショップ	
ネットワーク・コミュニティの運営 (運営のためのプラットフォーム構築)			●幹事 会、勉強 会	●勉強会		
モニタリングと科学的評価システムの開発 (予備ヒアリング及び評価システムの検討)		◎グループ ヒアリング				

※実施概要は3(4)会議等の活動、7-1ワークショップ等をご参照ください。
 凡例：コミュニティでの、◎調査、●幹事会・勉強会・ワークショップ・報告会

(3) 研究開発結果・成果

1. 研究統括及びコミュニティ運営デザイン・グループ (佐藤滋)

参考：『浪江宣言13・03』なみえ復興塾,まちづくりNPO新町なみえ,浪江町(協力),早稲田大学都市・地域研究所+都市計画佐藤滋研究室(協力),2013年3月9日

実施項目①：ワークショップによる多様な生活像の協働デザイン、及び町外コミュニティのモデルデザイン、に関しては

- 1) 昨年末に議論した内容を元に、多様な議論とイメージ喚起のための検討、模型の作製を現地との意見交換を行いつつ、1月から2月の初旬にかけて行った。
- 2) その上で2月9日に、午前午後の終日にわたり「なみえ復興塾」ワークショップを開催して、50名以上の参加者を得て、大筋のイメージ共有を図ることなど、概ね目的は達成できた。具体的には、ロールプレイによるデザインシミュレーションゲームの手法で、A) 仮設住宅団地を核にした町外コミュニティ、B) 避難受け入れ自治体の中心市街地での地元との協力による「まちなか型町外コミュニティ」、C) 帰還のための前線基地としての町内コミュニティ、D) 長期的に検討する「町内ニュータウン」のイメージ、E) 包括的移動サポートシステムとしての「新ぐるりんこ」により可能になる生活のイメージ、を午前・午後、一人の参加者が、二つのワークショップに参加できるように進めた。
- 3) その後、この結果を取りまとめて、2月23日に幹事会を行い、3月9日の報告会へ向けての報告書な内容の詰めを行い、詳細な内容を、幹事会で共有した。

このように、町内外のコミュニティのモデルデザインの初期段階を、そこでの生活道も含めて協働のデザインで進めることができた。

実施項目②：デザインワークショップの結果の広報と周知、意見聴取とフィードバック、に関しては、

- 1) 3月9日に、その上記の内容をまとめた報告書を発行し、なみえ復興塾のメンバーによる報告と、シンポジウム(出席者、馬場浪江町長、三保二本松市長、原田浪江商工会会長、浪江青年会議所会長、佐藤滋)を開催し、150名を超える町民関係者の出席のもとで開催された。ここでは、浪江町長と二本松市長により、提案された内容を吟味して、避難者側と受け入れ側が協力を連携して態勢の構築とプロジェクトの推進を図ることが話し合われた。また会場にパネルと模型の展示を行い、大きな関心と呼び、来場者に具体的な復興のイメージを理解いただき、成果があったと考える。その後、報道各社との懇談会を開催し広報にもつとめている。

以上のように、なみえ復興塾でのデザイン・ゲームの成果を町民、受け入れ側の市民だけではなく、行政のトップにも十分な周知を行い、意見交換を公開の場でできたことは大きな成果である。

- 2) 3月16日の浪江町主催の被災2周年の記念イベントにおいて、「まちづくりNPO新町なみえ」により活動報告、及びパネル展示を行い多くの共感を得た。
- 3) 10月の研究開始から2月のなみえ復興塾ワークショップまでの映像記録を編集し、3月9日の報告会で放映し、町民が主体的に参画して、広報した。

また、実施項目③：ネットワーク・コミュニティのプロセスデザイン、に関しては、上記のワークショップで基本的な考え方をまとめ、おおよその復興プロセスの仮説的な枠組みを提示し、今後の詳細な検討のための情報を得た。

2. 包括的生活サポートシステム開発グループ（浅野光行）

実施項目①：地域日常生活の課題認知システム

ネットワーク・コミュニティの人的ハブとなるコミュニティのリーダー層の人選、携帯端末の貸与、使用方法・インターネットを利用した情報交換の方法についての講習会を実施し、試験的な運用を始めたところである。

実施項目③：統合型移動システムの開発

統合型移動サービスの開発については、骨格デザインを検討する基礎的な資料を収集することを目的として、実施方法・実施内容に示した調査を実施した。

その結果、①多様なサービスが個々の目的別に提供されているが、それらを統合することは法規制等の点を含めて難しいこと、②仮設住宅団地の立地場所、規模等により、移動に関する問題・課題は多様であること、③最低限の日常生活を支える移動サービスだけでなく避難住民相互の交流等、生活の付加価値を高めるサービスが欠如していることを明らかにした。

その上で、下図に示すように統合型移動サービスを、①既存システムを保管する移動システム（なかよし号）、②一時帰宅を支援する移動システム（みらい号）、③旧来のコミュニティ維持等を目的とした避難住民の憩いの場となる移動システム（えんじょい号）の3種類の移動システムで構築することとなった。

また、統合型移動システムの構築では、次に示す4点を基本方針とすることを、運営主体になることが想定される関係者との間で共有化した。

■統合型移動システム構築の基本方針

①多様なニーズとサプライをマッチングする

既に日常生活の基本的な行動をサポートする移動システムがあることを考慮すると、新たな移動システムに対するニーズは、既存の移動システムで解消できない、多種多

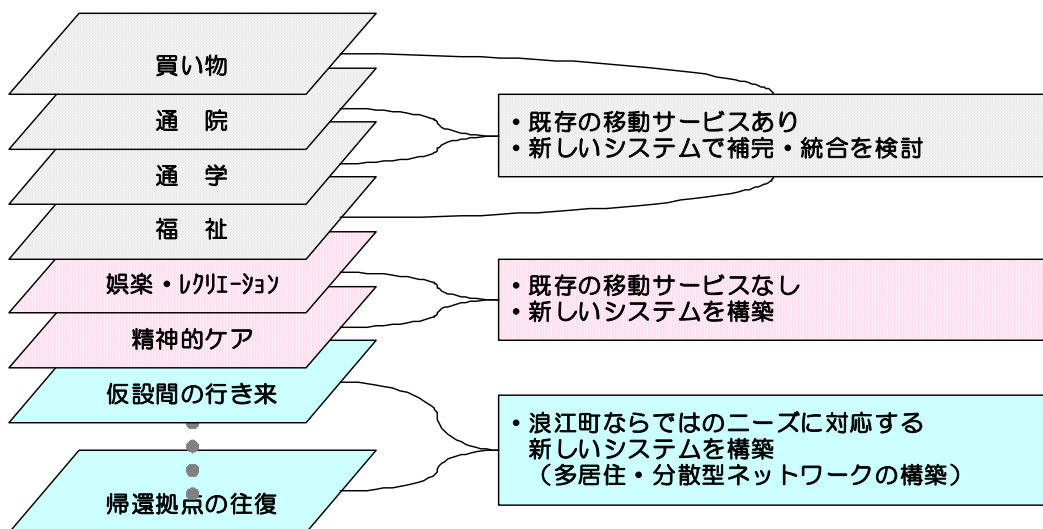


図 統合型移動サービスシステムの基本概念
 様なものとなることが想定される。

一方、統合型移動システムの構築においては、できるだけ柔軟なシステムとすること

が、社会状況の変化にともなうニーズの変化に機敏に対応していくことが可能になる。そのため、浪江町民自らの出来る範囲での協力・支援をベースに運営されることが望ましい。

大がかりな新たなシステムを構築するのではなく、このような多様なニーズとサプライがあることを前提にして、これらをマッチングする機能を中心にすえたシステムを構築する。

②できるところから、小さなシステムで

はじめから統合型のシステムを構築しようとする、大がかりなシステムを用意する必要があり、投資も大きな額が必要となる。

現在の広域避難生活は、当面の間続くことになるため、仮設住宅ごとに個々のニーズに合ったシステムを構築し、徐々に統合していくことが望ましい。

③システムを固定化しない

個々のニーズに対応するとともに、社会状況の変化に的確に対応していくために、システムを固定的なものとしなないことが重要である。

また、システムを固定化しないことが、配車システムなどへの初期投資を低く抑えることにつながる。

④浪江町ならではのニーズ、潜在的なニーズを積極的に掘り起こす

今後、帰還拠点が整備されたり、避難区域の再編がなされた場合、帰還拠点や浪江町の自宅との行き来に関する移動サービスのニーズが大きくなることが想定される。

また、精神的なケアの側面からも、潜在的なニーズを掘り起こしていくことが望ましい。

3. 総合的評価システム開発グループ（安藤清志）

本グループは、佐藤グループが実施するネットワーク・コミュニティのデザイン策定のための活動や、浅野グループが実施する移動サポートシステム「新ぐるりんこ」の導入などによって生じる避難住民の生活形態や心理的状态の変化を捉えることを目標としている。平成24年度は、そのための基礎的資料を収集するため、メンバーが復興塾のワークショップや発表会、仮設住民が企画する関連行事が実施される場所に赴いて参加者の行動観察を実施、可能な場合には、参加者に依頼して30～60分程度の面接をおこなった。また、NPO法人新町なみえ及び杉内多目的運動場仮設住宅の自治会長の協力を得て、主として仮設住宅集会室において住民の面接を実施してきた。現在、約20名に対して実施したほか、同仮設住宅において来る3月28、29日に集中的に実施する予定となっている。復興塾関係者へのヒアリングは、NPO法人新町なみえの理事長および中心的な会員3名に実施、これらに加えて二本松市民も含めヒアリング調査を実施した。

以上のヒアリングおよび面接調査の結果を適宜検討し、それに基づいて質問紙調査の内容および実施方法の具体的計画を進めるために、グループミーティングを12月22日（福島大学）と3月17日（尚絅学院大学）に実施した。これらのミーティングにおいては、メンバー間の知識の共有を進めるとともに、避難者の心理状況を捉える枠組みの予備的検討をおこなった。この暫定的なモデルに修正を加えた上で、3月28日の今年度最後のミーティング（二本松市）において質問紙に含める項目を検討、暫定版を作成した。

また、プロジェクトの柱の一つである包括的地域情報システムに関する評価の基礎的データを収集する方法について検討を始めた。現在、自治会代表者等約30名にiPadを配付し、第1回の講習会が開催された段階であるが、今後、この種の会合にメンバーが同席し、情報提供者の行動観察を行うほか、情報伝達の評価方法について検討を加えることになる。

(4) 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2012.10.2	キックオフミーティング	早稲田大学	これまで都市・地域研究所+佐藤研究室が進めてきた支援活動を紹介した上で、佐藤チーム(まちづくり)、浅野チーム(交通計画)、安藤チーム(社会心理学)、それぞれから今後の進め方の構想が発表された。また、科学技術振興機構の出席者方から、RISTEXの事業概要の説明を受けた。
2012.10.4	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	10月7日の幹事会の準備を目的として実施した。プロジェクトの概要、調査の進め方を確認し、WSでのヒアリング内容を確定した。WSでの説明内容を確認した。
2013.10.6	幹事会事前打合せ	安達公民館	10月7日の幹事会の準備を目的として実施した。佐藤研究室学生、浅野研究室学生より、模型の紹介やパネルの説明とともに、幹事会の進め方が発表された。
2012.10.9	浅野グループミーティング	早稲田大学	10月7日WSの反省会を目的に実施した。WSの報告・今後の方向性を確認し、ヒアリング調査の実施手順を決定した。
2012.10.13	安藤グループミーティング	東洋大学	早稲田大学で実施された全体ミーティング(2012.10.2)を受けて、評価グループの今後の活動についてメンバー間で意見の調整を行うことを目的として実施した。今後のミーティング開催の場所や回数、各メンバーの年間スケジュールなどが検討され、佐藤グループのこれまでの活動および大震災前後の浪江町について心理学的側面から情報週数を行うことが確認された。
2012.10.15	浅野グループミーティング	早稲田大学	生活行動調査の内容を確認し、調査内容を修正した。
2012.10.19	ヒアリング調査	二本松市内仮設住宅、昭和タクシー	仮設住宅自治会長・昭和タクシーへのヒアリング調査を行った。
2012.10.20	ヒアリング調査	二本松市内仮設住宅	仮設住宅自治会長へのヒアリング調査を行った。
2012.10.21	安藤グループミーティング	東洋大学	第1回ミーティングに参加できなかったメンバーを対象に、同じ内容に関して検討をおこなった。
2012.10.22	浅野グループミーティング	早稲田大学	10月19,20日現地調査結果の報告をし、今後の方向性を確認した。

2012.10.24	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	浅野研調査内容の報告、ヒアリング内容の摺合せを行った。
2012.10.29	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	現在までの調査結果を共有し、今後の調査内容を決定した。
2012.11.1	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	WSでの説明方法と説明内容を決定し、事前準備を行った。
2013.11.3	キックオフミーティング	二本松市市民交流センター	佐藤チーム、浅野チーム、安藤チームそれぞれの、これまでの取り組みを報告し、今後の活動の具体的な枠組みを話し合った。また、避難住民の移動の実態、新ぐるりんこの導入に向けた意向調査を行った。
2012.11.4	ヒアリング調査	二本松市内杉内仮設サポートセンター	杉内仮設の住民の自治会長に研究の概要を説明し、住民のグループディスカッションを行った。その後、学生が生活調査と今後の暮らし方のイメージに関するヒアリングを実施した。
2012.11.4	ヒアリング調査	二本松市内仮設住宅	前回の調査で訪問できなかった仮設住宅に訪問し、移動の実態、新ぐるりんこの意向調査を実施した。
2012.11.4	安藤グループミーティング	二本松市碧山亭	前日に実施された杉内仮設住宅における住民との意見交換会、その他の仮設住宅視察の結果を受け、今後の評価グループの活動の可能性について検討することを目的として実施された。各仮設住宅の位置や住宅の構造、集会室等について、今後の面接調査の実施可能性の点から意見を交換した。
2012.11.12	浅野グループミーティング	早稲田大学	研究室内で11月3-5日調査結果の報告を行った。
2012.11.21	佐藤グループミーティング	早稲田大学	浪江町避難住民が集う伝統的なイベントである「十日市」(11月22-24日)での活動展示内容と調査内容の確認を行った。
2012.11.22	佐藤・浅野グループミーティング	浪江町仮役場第二事務所	「十日市」(11月22-24日)での活動展示内容と調査内容の確認を行った。
2012.11.23 ～24	展示会、ヒアリング・アンケート調査	二本松市市民交流センター	会議室にてワークショップで資料した模型やパネルを展示し、学生を中心に来場者へ説明した。浪江の現地映像を上映した。展示会場とイベント会場に集まる浪江町の避難住民のみなさんに生活行動調査を行った。
2012.11.25	ヒアリング調査	桑折町内、桑折仮設住宅、桑折町役場	桑折仮設の小澤自治会長を訪問し、仮設住宅の状況をヒアリング調査した。災害公営住宅の検討予定地を視察し、桑折町役場担当者に現状を確認し

			た。
2012.11.26	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	研究室内で11月22-24日調査結果の報告を行った。
2012.12.8 ～9	領域合宿	大橋会館	JST事業関係者の研究を学び、浪江町復興支援に有益な意見交換、領域アドバイザーから助言を頂いた。
2012.12.15	幹事会、勉強会	二本松市内あだたらふれあいセンター研修室	JST勉強会と現在までの活動報告を行い、今後の事業展開の検討の参考事業を専門家が紹介し、勉強会を行った。その後、今後実現にむけて取りかかれそうな事業について意見交換を行った。
2012.12.16	検事会、勉強会	二本松市内あだたらふれあいセンター研修室	前日の議事確認を行い、どのような体制で進めていくことが考えられるのか、既存の組織や新たに法人設立を検討するなど、実現に向けた事業スキームの検討を行った。
2012.12.21	アクションリサーチ研究会	JST東京本部	一般論文とアクションリサーチによる論文作成の相違点に関する検討を行った。
2012.12.22	安藤グループミーティング	福島大学	これまで参加した復興塾および浪江町の行事において観察ないし意見聴取を行った避難住民の心理的状況について検討を加えること、および今後の評価対象の選定を行うことを目的に実施した。年が明けてから本格的に面接調査を実施すること、情報端末を配付された町民に対する面接、質問紙調査の実施可能性についてを検討することなどが確認された。
2013.1.15	浅野グループミーティング	早稲田大学	iPadの利用法の検討・1月20-21日の出張準備を目的に実施した。包括的生活サポートシステムを構築する上で、iPadの利用法を検討した。また、1月20-21日の出張計画の打ち合わせを行った。
2013.1.20	佐藤・浅野グループミーティング、勉強会	二本松市内杉内仮設住宅	杉内仮設住宅における生活支援システムの実装に関する検討を行った。①JST浪江復興プロジェクト(名称検討)における杉内仮設住宅の位置づけ確認、②新ぐるりんこの試験運用の検討、③福祉関連生活サポートシステムの検討を行った。
2013.1.21	佐藤・浅野グループミーティング、勉強会	浪江町仮役場第二事務所、二本松市内	20日の議事確認と国への提言書の素案を確認した後、町外コミュニティの検討敷地である二本松市内の遊休地を視察した。
2013.1.26	佐藤グループミーティング	早稲田大学	2月9日の町内コミュニティWS内容の検討を行った。
2013.1.28	佐藤・浅野グループミーティング	早稲田大学	2月8-14日の出張準備(WS準備など)を目的に実施した。佐藤研と浅野研合同で2月9日の町内・町外コミュニティのシナリオ作成を行った。2月12日の浪江小

			学校の生徒に対する発表の準備を行った。
2013.1.28	浅野グループ ミーティング	早稲田大学	今後必要となるシステム開発の依頼内容(予約システム、運行ルート、ipadとの連動)と、来年度の予算検討を行った。
2013.1.29	佐藤・浅野・安藤グループ ミーティング	早稲田大学	JSTの進行状況共有と原子力損害賠償紛争センター黒田純吉弁護士による東電の賠償問題の情報共有を行った。
2013.1.30	佐藤グループ ミーティング	早稲田大学	2月9日の町内・町外コミュニティのシナリオと拠点WSのロールプレイを行い、修正した。
2013.2.6	浅野グループ ミーティング	早稲田大学	2月9日WSの最終打ち合わせを目的に実施した。発表内容のロールプレイを行い、精査、修正を行った。
2013.2.9	なみえ復興塾	二本松市民交流センター	①まちなか型町外コミュニティの検討、②仮設住宅を段階的に建替える町外型コミュニティの検討、③町内コミュニティの検討、④新ぐるりんこの試験運用の検討、⑤ニュータウンの検討を行った。
2013.2.8	佐藤・浅野グループ	ゆいまーる那須、浪江町仮役場第二事務所	町外・町内コミュニティの参考にする為、高齢者用サービス付き住宅視察した。二本松にて2月9日のWSの進め方の確認を行った。
2013.2.12	iPad講習会	二本松市民交流センター	iPadの管理者を対象に、iPadの基本的な使い方から設定に関する使用説明会を行った。
2013.2.18	浅野・佐藤グループ ミーティング	早稲田大学	3月22日出張に向けて、幹事会での検討項目の整理や具体的な準備に向けた話し合いを目的に実施した。
2013.2.22	ワークショップ	浪江小学校 (二本松市内)	小学生が考える未来の浪江町の絵と模型の写真、作者と説明をパワーポイントにまとめて発表を行った。
2013.2.23	なみえ復興塾 幹事会、サイト ビジット	浪江町仮役場 第二事務所	なみえ復興塾の報告会の内容と進め方について議論することを目的とした。3月9日に開催するシンポジウムの構成と、使用するプレゼンテーション資料と提言案をベースに意見交換を行った。
2013.3.5	浅野グループ ミーティング	早稲田大学	移動システムの構築を目的に実施した。福島大学の吉田樹先生を研究室に招き、予約システムの構築に関する話し合いを行った。
2013.3.9	シンポジウム	福島県男女共生センター	なみえ復興塾の成果報告会として、NPOのみなさんが、10の提言を発表した。同時になみえ復興塾で使用していた模型やパネルも展示し、来場者へのアンケートを実施した。
2013.3.16	なみえ3.11復興のつどい	福島県男女共生センター	3月9日のシンポジウムと同様にNPOのみなさんが、10の提言の発表を行った。
2013.3.17	安藤グループ ミーティング	尚絅学院大学	これまで実施した面接調査の結果について検討すること、今後の活動内容について検討することを目的に

			実施された。避難住民の心理をどのような側面から分析することが可能か検討を加え、それに、基づいて質問紙調査の設計について議論した。
2013.3.18	浅野グループ ミーティング	早稲田大学	3月22出張に向けた準備を目的に実施した。二本松出張に向けての準備計画を話し合い、ぐるりんこのロゴに関する検討を行った。
2013.3.22	浅野グループ ミーティング	早稲田大学	新ぐるりんこの事業をH25年度から実施する場合の、担い手と車両、事業計画案の検討を行った。
2013.3.28	安藤グループ ミーティング	二本松市碧山亭	年度末に集中的に実施された面接調査について各メンバーが担当したケースを報告し、避難住民の全体的状況について検討することを目的として実施した。意見交換後、今後の質問紙調査、情報端末使用グループに対する面接調査の具体的方法について検討を行った。

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

研究成果として、3月9日には『浪江宣言』と言う報告書にまとめ、150名を超える町民関係者の出席のもとで、報告会とシンポジウムが開催され、活動内容の理解を得ることができた。この内容は、3月16日の浪江町主催の被災2周年の記念イベントでも、「まちづくりNPO新町なみえ」により報告され、多くの共感を得た。さらに、これらの成果を活用して、市民版の復興シナリオをだれにでもわかりやすく説明でき、「今後の暮らしの意向調査」の手助けとなるような資料を作成中である。

5. 研究開発実施体制

(1) 研究統括及びコミュニティデザイン・運営グループ

① 佐藤 滋（早稲田大学、教授）

② 実施項目

- ・ ワークショップによる多様な生活像の協働デザイン、及び町外コミュニティのモデルデザイン
- ・ デザインワークショップの結果の広報と周知、意見聴取とフィードバック
- ・ ネットワーク・コミュニティのプロセスデザイン

(2) 包括的生活サポートシステムの開発グループ

① 浅野 光行（早稲田大学、教授）

② 実施項目

- ・ 地域日常生活の課題認知システムの開発
- ・ 生活・福祉・介護サポートシステムに基本となる骨格の検討
- ・ 統合型移動システムの基本となる骨格デザイン

(3) 総合的評価システム開発グループ

① 安藤 清志（東洋大学、教授）

② 実施項目

- ・ 社会心理学的評価手法の理論化および評価
- ・ コミュニティの質に関する評価
- ・ 法的、人権的見地からの評価、対応

6. 研究開発実施者

代表者・グループリーダーに「○」印を記載

研究統括及びコミュニティデザイン・運営グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	佐藤 滋	サトウ シゲル	早稲田大学理工学術院	教授	研究の統括とネットワーク・コミュニティの検討
	佐藤 尚弘	サトウ ナオヒロ	浪江町役場復興推進課	主幹	ネットワーク・コミュニティの検討
	阿部 俊彦	アベ トシヒコ	早稲田大学都市・地域研究所	客員主任 研究員	ネットワーク・コミュニティの検討と デザイン
○	神長倉 豊隆	カナクラ トヨタカ	まちづくりNPO新町なみえ	理事長	ワークショップによるライフスタイル の共同デザイン
	白木 里恵子	シラキ リエコ	早稲田大学創造理工学部	助手	ワークショップによるライフスタイル の共同デザイン
	宋 基佰	ソウ キバク	早稲田大学理工学術院	研究員	システム開発助手
	中村 悟	ナカムラ サトル	早稲田大学都市・地域研究所	研究補助	システム開発助手
	千葉景房	チバ アキフサ	早稲田大学社会連携推進室	研究補助	システム開発助手
	荒井 唯香	アライ ユカ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理
	下田 瑠衣	シモダ ルイ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理
	菅野 圭祐	スガノ ケイスケ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理
	関谷 有莉	セキヤ ユリ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理
	二宮 彬	ニノミヤ アキラ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理
	松村 尚之	マツムラ ナオユキ	早稲田大学理工学術院	アルバイト	模型作成、情報の収集と整理

包括的生活サポートシステムの開発グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	浅野 光行	アサノ ミツユキ	早稲田大学理工学術院	教授	統合型移動システムの開発
	土方 正夫	ヒジカタ マサオ	早稲田大学 社会科学総合学術院	教授	地域包括情報システムの開発
	深澤 良彰	フカザワ ヨシアキ	早稲田大学理工学術院	教授	地域包括情報システムの開発
○	磯部 文雄	イソベ フミオ	城西国際大学福祉総合学部	学部長・	福祉サポートに関わる制度研究

				教授	
○	川村 博	カワムラ ヒロシ	NPO法人JIN	理事長	包括的福祉・介護サポートシステムの開発
	佐藤 健一	サトウ ケンイチ	福島県中小企業診断士協会	中小企業 診断士	コミュニティと連携する地域産業振興
	岡田 昭人	オカダ アキト	早稲田大学都市・地域研究所	招聘研究員	福祉住宅の供給システム

総合的評価システム開発グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	安藤 清志	アンドウ キヨシ	東洋大学社会学部	教授	社会心理学的評価手法の理論化および評価の実践
	渡辺 浪二	ワタナベ ナミジ	フェリス女学院大学文学部	教授	コミュニティの質に関する評価研究
	黒田 純吉	クロダ ジュンキチ	四谷共同法律事務所	弁護士	法的、人権的見地からの評価、対応
	堀毛一也	ホリケ カズヤ	東洋大学社会学部	教授	コミュニティの質に関する評価研究
	飛田操	ヒダ ミサオ	福島大学人間発達文化学類	教授	コミュニティにおける社会的ネットワークの評価研究
	水田恵三	ミズタ ケイゾウ	尚絅学院大学人間心理学科	教授	コミュニティの質に関する評価研究
	結城裕也	ユウキ ヒロヤ	東洋大学 人間科学総合研究所研究員	研究員	データ整理
	佐藤史緒	サトウ シオ	東洋大学 人間科学総合研究所	研究員	データ整理

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加 人数	概要
2012.10.7	なみえ復興塾 幹事会	二本松市第二 事務所	20名	2012年8月までのヒアリング調査とワークショップにおける意見交換を受けて、前提条件を設定し、町外コミュニティと町内コミュニティの模型を作製し意見交換を行った。また、ぐるりんこの実態・新ぐるりんこの意向調査を浪江町と二本松の地図に書き込む形で整理した。
2012.11.3	なみえ復興塾	二本松市民交 流センター	50名	①まちなか型町外コミュニティの検討、②仮設住宅を段階的に建替える町外型コミュニティの検討、③町内コミュニティの検討、④新ぐるりんこの試験運用の検討、を行っ

				た。
2013.2.9	なみえ復興塾	二本松市民交流センター	40名	①まちなか型町外コミュニティの検討、②仮設住宅を段階的に建替える町外型コミュニティの検討、③町内コミュニティの検討、④新ぐるりんこの試験運用の検討、⑤ニュータウンの検討を行った。
2013.2.12	ワークショップ	浪江小学校 (二本松市内)	40名	2012年8月のシンポジウムに参加された浪江小学校校長先生からのご提案で、浪江小学校の小学生と浪江町の未来を考え、絵に描くワークショップを行った。
2013.2.13	ワークショップ	浪江小学校 (二本松市内)	40名	前日に描いた絵を大学生の支援を受けながら、模型材料を使って3つの未来の浪江を作成した。
2013.2.22	ワークショップ	浪江小学校 (二本松市内)	40名	完成した未来の浪江町の絵と模型の写真をパワーポイントにまとめ、小学生が全員の前で発表し、大人が行っている「なみえ復興塾」の議論を形にするプロセスを体験した。
2013.3.9	シンポジウム	福島県男女共生センター	150名	なみえ復興塾の成果報告会として、NPOのみなさんが、10の提言を発表した。同時になみえ復興塾で使用していた模型やパネルも展示し、来場者へのアンケートを実施した。
2013.3.16	なみえ3.11復興のつどい	福島県男女共生センター	150名	3月9日のシンポジウムと同様にNPOのみなさんが、10の提言の発表を行った。

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

①書籍、DVD（タイトル、著者、発行者、発行年月等）

- 『なみえ復興塾 浪江町「協働復興まちづくりワークショップ」の記録2012.5.12～8.18』早稲田大学都市・地域研究所／千葉秋房, 2012年9月30日
- 『浪江町実景』早稲田大学都市・地域研究所／千葉秋房, 2012年9月30日
- 『浪江宣言13・03』なみえ復興塾, まちづくりNPO新町なみえ, 浪江町(協力), 早稲田大学都市・地域研究所＋都市計画佐藤滋研究室(協力), 2013年3月9日

②ウェブサイト構築（サイト名、URL、立ち上げ年月等）

- まちづくりNPO新町なみえHP（2011年11月立上げ）
<http://www12.plala.or.jp/sinmachi-namie/>
- まちづくりNPO新町なみえFacebook（2011年12月立上げ）
<https://www.facebook.com/pages/まちづくりNPO新町なみえ/328633710497985>
- 浪江町復興支援協働プロジェクト（2011年11月立上げ）, 佐藤滋研究室HP からリンク http://www.satoh.arch.waseda.ac.jp/satoh_lab/modules/project/namie.html
- 「なみえ復興塾 2012年」撮影・編集 千葉秋房, 2012年5月12日～8月18日
<http://www.youtube.com/watch?v=DqDONI8B8tQ&feature=youtu.be>
- 「浪江町 2012年初夏の風景 QuickTime H 264」撮影・編集 千葉秋房, 2012年6月8日

<http://www.youtube.com/watch?v=qqHGGRnD9rA>

- ・ 「浪江実景2 2012秋 QuickTime H 264」撮影・編集 千葉秋房, 2012年11月5日
<http://www.youtube.com/watch?v=Ibjf5MKMjw0>
- ・ 「2012年度上半期報告書 『浪江町・復興への道筋と24のプロジェクト-』」佐藤滋研究室HPからリンク
http://www.satoh.arch.waseda.ac.jp/satoh_lab_20110708/project/namie/24projects.pdf
- ・ 「2012年度後期報告書『浪江宣言 13・03』」まちづくりNPO新町なみえHPからリンク http://www12.plala.or.jp/sinmachi-namie/mysite3/0309_saisyu.key.pdf

③学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・ 「震災復興のパラダイムシフト」,日本自治学会総会シンポジウム講演・パネルディスカッション, JA長野県ビル, 2012年11月25日
- ・ 「なみえ協働復興まちづくりシンポジウム」まちづくりNPO新町なみえ, 福島県男女共生センター, 2013年3月9日
- ・ 「なみえ復興塾 活動報告」なみえ3.11復興のつどい実行委員会, 福島県男女共生センター, 2013年3月16日
「原発事故被災者によるコミュニティ再生を支援してー福島県浪江町」, 新建築家技術者集団復興支援会議報告会, 板橋区立グリーンホール, 2013年3月2日
- ・ 「福島県浪江町における復興まちづくりから見えてきたこと」, 上高田まちづくりの会, 中野区上高田区民活動センター, 2013年3月20日
- ・ 「浪江町 地域主体による復興シナリオ検討支援」, 日本建築学会東日本大震災2周年復興支援シンポジウムにて講演・パネラー, 建築会館ホール, 2013年3月27日

7-3. 論文発表（国内誌 4 件、国際誌 0 件）

（国内誌）

- ・ 佐藤滋『原発被災地・浪江町はどのように復興できるかー広域避難者のための□多拠点型ネットワーク・コミュニティの構想とデザイン』季刊まちづくり37号, 学芸出版社, 2013年1月15日
- ・ 白木里恵子『浪江町 地域主体による復興シナリオ検討支援』, 日本建築学会東日本大震災2周年シンポジウム講演集, pp21-22, 2013年3月27日
- ・ 菅野圭祐, 松村尚之, 関谷有莉, 下田瑠衣, 荒井唯香, 白木里恵子, 阿部俊彦, 岡田昭人, 佐藤滋『福島県浪江町避難住民による協働の復興まちづくり その1ー市民版復興ビジョンとシナリオの検討-』, 日本建築学会大会（北海道）梗概集, 投稿中, 2013年8月
- ・ 白木里恵子, 菅野圭祐, 松村尚之, 関谷有莉, 下田瑠衣, 荒井唯香, 宋基伯, 阿部俊彦, 岡田昭人, 佐藤滋『福島県浪江町避難住民による協働の復興まちづくり その2ー始動期におけるまちづくり市民事業の検討-』, 日本建築学会大会（北海道）梗概集投稿中, 2013年8月

（国際誌）なし

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

①招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 1 件)

②口頭講演 (国内会議 2 件、国際会議 1 件)

③ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議 0 件)

(招待講演)

- ・ 韓国壇国大学主催国際シンポジウムにて招待講演「3・11以降の都市と建築」
(2012年11月9日、壇国大学)

(口頭発表)

- ・ Reshape the Villages and Cities Devastated, and Raise the Communities with respect from the 2011 Tōhoku Earthquake and Tsunami Disaster (the Great East Japan Earthquake), International Conference of ISUF, (2012年10月18日, Delft)
- ・ 「浪江町 地域主体による復興シナリオ検討支援」,日本建築学会東日本大震災2周年シンポジウムにて講演・パネリスト (2013年3月27日、建築会館ホール)
- ・ JST-Ristex領域シンポジウムにて口頭発表 (2013年2月27日、東京大学)

(ポスター発表)

- ・ JST-Ristex領域シンポジウムにてポスター発表 (2013年2月27日、東京大学)
- ・ 東日本大震災2周年シンポジウム日本建築学会建築展にて浪江町 地域主体による復興シナリオ検討支援で使用した模型3台・ポスター3点を展示 (2013年3月25日～29日、建築会館ギャラリー)

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿

- ・ 『浪江の商店主らが独自の「復興策」提言 二本松でシンポ』,2013年3月10日 福島民友トピックス
- ・ 『浪江復興へ10項目提言』2013年3月10日 読売新聞
- ・ 『3月16日に浪江町「復興のつどい」』2013年1月27日 福島民報
- ・ 『なみえ3.11復興のつどい』広報なみえ2013年4月号 浪江町
- ・ 『浪江の姿 模型に』2013年2月23日 福島民報
- ・ 『30年後の浪江 ぼくらの手で』2013年2月19日 読売新聞
- ・ 『東日本大震災:町立浪江小全校児童30人、30年後の理想の街を模型に 自然にあふれ、風・水力発電並ぶ /福島』2013年02月14日 毎日新聞
- ・ 浪江町の未来を考えよう (浪江町立浪江小学校HP ふるさとなみえ科ページ)
http://www.namie-es.jp/furusato_namie/20130212-13/index.html

②受賞 なし

③その他 なし

7-6. 特許出願

①国内出願 (0 件) なし